

期待されるバイオスティミュラント

◆レゾナック、生物刺激剤バイオスティミュラントに参入

2024年2月、レゾナックは化学合成物質を配合しない、バイオスティミュラント資材（Biostimulant：BS）である「KROPICO」の日本国内での本格販売を開始したと発表した。今後、中国、韓国、東南アジアを中心に展開していく計画だ。

KROPICOは、主成分がカニやエビなどの甲殻類や植物など天然物由来原料から生産した数種類の機能の異なるオリゴ糖を世界で初めて配合したBSであり、植物の生育時の環境ストレスを緩和し、育成を促進する。メカニズムも解析済みだ。

BSは天然成分を中心に組み合わせて、植物が本来持っているストレス耐性や免疫力を高め、耐寒・耐暑性、病害虫耐性などの機能を付与し、植物の成長を促進できる。BSは通常の肥料とは異なり、新しい農業資材のカテゴリーに分類される。欧米中心に高い需要があり、22年度の市場は35億ドルと推定されている。

◆農薬メーカーもBSへの参入続く

各農薬メーカーもBSの事業に積極的だ。日本農薬は、23年10月に微生物を含有するBS剤「クロスバリュー」を販売開始すると発表した。住友化学は、23年にグループ傘下で米国でBSを手がけるFBサイエンスに生物農薬をコアとする米子会社ベラント・バイオサイエンスを統合し、米国での事業拡大を目指している。また、バイエルクロップサイエンスも欧米で販売中の海藻抽出物と肥料成分とを含むBS製品「アンビションアルガ」を22年から国内導入している。OATアグリオはスペイン子会社が生産し、欧州とアジアで展開している製品を日本でも事業化を計画する。その他、三井化学グループ、出光興産グループ、日産化学、日本曹達などが、事業化や事業拡大に向け積極的だ。

BS参入や事業化検討の理由の一つに農林水産省のみどりの食料システム戦略がある。環境負荷の低減、持続的な農業生産の確保のため、「化学農薬使用量（リスク換算）の低減」を掲げ、19年を基準とし、30年までに10%、50年までに50%低減する目標を設定している。食の安全はもとより、価格が高騰する肥料の使用量の最適化、作物収量増加、育成速度加速などBSへの期待は高い。【下田晃義】